東方虬の「蚯蚓賦」をめぐって

――その類書としての應用――

田口暢穂

一

書籍の分類の名。種々の種類の書籍を集め、其の事項によつて分類して編纂し、検索に便にした書物。（下略）

「類書」についての説明を『大漢和辭典』（修訂版）から借用すると右の如くである。

類書というものは、右にいうとおり、事項ごとの文獻記述が容易に通覧でき、古典籍の記事を一つ一つあたらずにすむ利點がある。けれどもまた、類書の引用を通覧するのみで事足れりとしてはならぬことは言を俟たない。まず第一に、類書の引用と、その文獻の通行の形が相違していることがあり得る。つぎにより根本的な問題として、古人の知識は類書の斷片的な記述の蓄積で成り立っていたわけではない。古人が詩文を作るにあたって典故のある語を用いたとしても、それはその度に類書に據って援用したのではなく、主要な典籍に見える語句は充分に咀嚼し、自家藥籠中のものとしていたと考えねばならぬからである。『四庫全書總目提要』類書類に、

此體一興、而操觚者易於檢尋、注書者利於剽竊、輾轉稗販、實學頗荒。

と、類書の安易な利用によって篤實な學問が衰退することを、かなり強い調子で歎じているのも、蓋しそのあたりの事情をふまえてのことであろう。

しかし類書にはいまひとつの役割がある。引用文を佚文の蒐集や、現行の文獻の校訂などの資料として用いることである。すでに『四庫提要』にも、前の引用に續けて、

然古籍散亡、十不存一、遺文舊事、往往託以得存。

とあるとおりである。いま佚文蒐集について考えるだけでも、馬國翰『玉函山房輯佚書』、魯迅『古小說鉤沈』、前記二種とは些か性質を異にするが、嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』など、類書を主要な資料とした業績が直ちに頭に浮かぶ。校訂資料として利用されたケースに至っては枚擧に暇がない。このような狀況から判斷すると、今日では類書は資料として利用されることが多くなっているように思われる。

筆者自身は、事項ごとにまとめられた文獻を通覽するために類書を利用するのであるが、必ずしも文獻調査の手間を惜しんでのことではない。そこに引用された文獻を見ることによって、その類書が編纂された頃の、その事項に關する文獻知識の範圍やあり方がある程度窺えると考えてのことである。

例えば『藝文類聚』である。『藝文類聚』には初唐期までの文獻が引かれている。そこに引かれている文獻であれば、たとい今日傳わっていない佚文であっても、當時の人々は知っていた可能性があると考えることができる。また、引用された文獻を通覽すれば、當時の人々が、その事柄について、どのような文獻によって、どのように理解していたか、どのようなイメージを持っていたか、ある程度把握できる。すなわち『藝文類聚』によって、六朝から初唐にかけての文獻知識の範圍やあり方をある程度窺うことができることになる。(1)

したがって筆者は唐詩を讀むにあたって、ある事柄や表現が唐人の知識の範圍内にあったか否かを考えるのに、『藝文類聚』や『初學記』、場合によっては『太平御覽』などの類書を手がかりにすることがはなはだ多かった。具體的に言えば、『四庫提要』の「書に注する者剽竊に利あり」を戒めとしつつ、語句の出典を探る手がかりとしてきたのである。そこで、以前、韓愈が蚯蚓の鳴く聲をうたった詩について拙文を綴ったおりにも、手順にしたがって『藝文類聚』と『初學記』によって唐人の蚯蚓に關する知識を確かめようとした。(2)ところが『藝文類聚』にも『初學記』にも「蚯蚓」の項は立てられていないのである。その時に氣づいたのが、ここに取り上げた「蚯蚓賦」であった。類書に「蚯蚓」の項はなくとも、この賦を讀み解くことによって、唐人の蚯蚓に關する知識が探れるのではないかと考えたのである。

二

「蚯蚓賦」は、初唐の人、東方虬の作。わずか一三八字の小品ながら、題名のとおり、蚯蚓を樣々な角度からうたっ

た、一種の詠物の賦である。

いったい詠物の詩や賦には、題材に關する文獻的な知識にもとづいた表現が多い。往昔の文人には容易に理解し得る表現であったかもしれないが、今日我々が理解するためには、その表現が依據する文獻にさかのぼって意味を確かめなおさねばならない。典故となった古典籍は、殘念ながらもはや我々の常識の範圍に屬してはいないのである。けれども逆に、それらの詩賦を讀み解くにあたって一つ一つ典故を確かめてゆくならば、その詩賦は、我々にとっては、古典籍への道標となるのだということもできよう。このような觀點からすれば、詠物の詩賦は類書に近い機能を持つものとして利用できることになる。（無論、文學作品の鑑賞という立場からすれば、邪道の譏りは免れない。）

詠物の詩賦が類書のような性格を持つというと、あるいは變に思われる向きもあるかもしれない。だが、例えば李嶠の「百詠」を典故を確かめながら讀むとき、その詩題を類書の項目と考えたくなりはしないであろうか。賦の場合、その傾向は一層强まる。賦は元來敍事をこととし、陳述的なものである。なかでも詠物の賦は、題材に關する描寫、說明の繰り返しが多くなりがちである。その描寫や說明が典故を援用しているとき、それらの句はほとんど文獻の斷片の羅列と化す。その窮極の形が宋の吳淑の『事類賦』とその注であろう。作者（注釋者）吳淑は意識的に詠物賦のスタイルで類書を作り、太宗の命によって讀者のためにその據る所を注したのであった。[3] 文獻にもとづく詠物の賦と類書の距離が近いことは、このような例からも窺えよう。なお四庫全書には『事類賦』を類書に分類するが、よく作者の意を汲み、作品の性格を見極めた扱いというべきであろう。

さて、かく賦が類書に近い性格を持つならば、「蚯蚓賦」についてその敍述のもとづくところを確かめてゆくことによって、初唐期の蚯蚓に關する文獻知識のありようがある程度窺えるであろう。ここに「蚯蚓賦」の注解を試みる所以である。またこれは筆者自身の既發表の拙文を補おうとするものでもある。

三

「蚯蚓賦」の作者、東方虬とはいかなる人であったか。

まず、新舊兩『唐書』には傳記は立てられていない。傳記らしい記事が見えるのは、『唐詩紀事』卷七（中華書局排印本一九六五年）である。

虬、武后時爲左史。嘗曰、百年後、可與西門豹作對。

我々はこれによってわずかにその官歴を知ることができる。

左史は起居郎のことで、右史＝起居舍人とともに天子の言行を記錄する官。『唐會要』卷五六（上海商務印書館　國學基本叢書　一九三五年）「起居郎起居舍人」の條に左の如き記事がある。

貞觀二年、移起居舍人於門下省、改爲起居郎。顯慶三年十二月十五日、又改爲中書省起居舍人。兩員。品同起居郎。龍朔三年、改爲左右史。咸亨元年、復爲起居舍人。天授元年、又改爲左右史。神龍元年、復爲起居舍人焉。

『文獻通考』卷五〇（臺灣新興書局影印本　一九六三年）によってこれに若干補足すると、太宗の貞觀二年（六二八）に置かれた起居郎は二名。高宗の顯慶三年（十二月十五日は六五九年になる）には、起居の職を中書省にもどし、起居舍人を置いて起居郎と左右に分掌せしめた。そして高宗の龍朔三年（六六三）に左右史に改めたとき、郎を左史、舍人を右史としている。

こうしてみると、左右史の職は、高宗のときと武后のときと、二度置かれているわけであるが、東方虬が左史となったのは、『唐詩紀事』から明らかなように、武后のとき、天授元年（六九〇）以後のことである。

なお、話が前後するが、進士及第の年については『登科記考』には記載がない。

東方虬の官界にあっての實績は全くわからない。彼自身の言、「西門豹と對を作すべし」の「西門豹」は戰國時代魏の名臣をさすのであろうが、その人と對をなすというのは、單に文字の上で對になるという諧謔なのか、自分も古人に引けをとらぬ名臣であるという自負だったのか。今日ではもはや判斷の手がかりがない。

その他、管見の範圍で目についた逸話を擧げておく。

武后遊龍門、命羣臣賦詩、先成者賞錦袍。左史東方虬既拜賜、坐未安、宋之問詩復成、文理兼美。左右莫不稱善。乃就奪袍衣之。

（『隋唐嘉話』卷下〈中華書局排印本　一九七九年〉）

この逸話は新舊兩『唐書』および『唐才子傳』卷一の宋之問傳に引かれ、「奪錦」「奪袍」などの熟語にもなっている。錦袍を取り上げられた人物として後世に名を殘すのは、少し氣の毒な氣がするけれど、東方虬が當時宮廷詩人として活躍し、しかもある程度の評價を受けていたことは窺えよう。

これと關聯して注意を引くのが、陳子昂「修竹篇并序」の序である。些か長いが、左に引いておく。

東方公足下。文章道弊五百年矣。漢魏風骨、晉宋莫傳。然而文獻有可徵者。僕嘗暇時觀齊梁閒、彩麗競繁、而興寄都絶。每以永歎。思古人常恐逶迤頹靡、風雅不作、以耿耿也。一昨於解三處見明公詠孤桐篇。骨氣端翔、音情頓挫、光英朗練、有金石聲。遂用洗心飾視、發揮憂鬱。不圖正始之音、復覩於玆。可使建安作者相視而咲。解君云、張茂先、何敬祖、東方生與其比肩。僕亦以爲知言也。故感歎雅製、作脩竹詩一篇。當有知音、以傳示之。

（四部叢刊本『陳伯玉文集』巻一）

ここにいう「解三」は解琬であろうか。『全唐詩』巻八四（陳子昂）に、『歳時雜詠』によって「晦日宴高氏林亭并序」という詩を收める（『陳伯玉文集』未收）。その序の末尾に「同探一字、以華爲韻」とあって、「尋春遊上路、追宴入山家。（下略）」の詩が載せられているのである。ところが同じ「晦日宴高氏林亭」という題の詩が巻一〇五解琬の條に見え、題下に「同用華字」と注する。同じ時の作と考えてよいであろう。[6] 解琬の傳は『舊唐書』巻一〇〇、『新唐書』巻一三〇に見える。魏州元城（河北省大名縣附近）の人。幽素の擧に應じ、則天武后のとき、邊境の事に手腕をふるった。開元五年（七一七）、同州刺史となり、翌年八十餘歳で卒した（『舊唐書』傳。『新唐書』は五年に卒したとする）という。陳子昂や東方虬とは同時代の人であり、しかも同じく會して詩を作ったことがある人物。「解三」が解琬であった可能性は高い。

さて、この序は『唐詩紀事』巻七東方虬の條にすでに引かれ、そこでは「陳子昂寄東方左史脩竹篇序云、……」と、この詩と序を直接東方虬に寄せたことになっている。そのほうが冒頭の「東方公足下」という呼びかけや、「明公の孤桐を詠ずるの篇を見る」という措辭に相應しい。いずれにせよ、『唐詩紀事』が引いているところをみると、この序は東方虬の詩風に關する評として、早くから注目されていたのであろう。漢魏の風骨が傳わらなくなり、齊梁の詩が徒らに修辭をきそうのを歎じたうえで、東方虬の「孤桐篇」を建安の詩に匹敵する、とたたえ、解三が東方虬を晉の張華・何劭に比するのに同調する。漢魏詩への復古をめざし、宮廷詩壇からは離れたところに身を置いた陳子昂が、武后の遊びに從った宮廷詩人の作品をこれほどにも稱讚するのは、今日の目で見るとちょっと不思議な氣もするが、ここにいう「孤桐篇」

は已に佚して傳わらぬから、陳子昂がその詩のどのような點を評價したのかは全くわからない。けれどもともかく、東方虬が同時代の詩人達から相當に高く評價されていたことは推測できるのである。

以上、東方虬に關する傳記資料及び逸話の類を紹介してみた。まことに心細い狀況であるが、後代に編まれた總集類を見ても、この程度の記述しかないようである。明の高棅の『唐詩品彙』詩人爵里詳節には「官至左史、武后時人」、『全唐文』小傳にも「武后朝、官左史」と記すのみである。『全唐詩』小傳はやや詳しいが、武后に仕えて左史となったこと、西門豹と對を爲すべしといったこと、陳子昂の「修竹篇序」に言及があること、を傳えるばかりであり、「孤桐篇」が已に佚したこと、いま詩四首を存することを附記しているものの、要するに『唐詩紀事』の範圍を出ない。强いて結論めいたことをいうならば、東方虬は生歿や進士及第の年は不明、天授元年（六九〇）以降、武后に仕えて左史となった。陳子昂や宋之問と同じ頃（七世紀末頃から八世紀初頭頃）に活動し、詩人として一定の評價を得ていた人物、ということになろうか。

東方虬は、作品もあまり傳わっていない。管見の限りでは、『全唐詩』（中華書局排印本　一九六〇年　一九七九年第二次印刷）所收の四首の詩、『全唐文』（臺灣大通書局影印本　一九七二年）所收の三首の賦が今日見得る全作品である。さきに陳子昂の「修竹篇序」に見える「孤桐篇」という詩が已に佚したことを述べたが、おそらくその他にも多くの作品が散佚して、現狀のようになったのであろう。

左にそれぞれの題目を示しておく。

『全唐詩』卷一〇〇
「昭君怨三首」「春雪」
『全唐文』卷二〇八
「尺蠖賦」「蚯蚓賦」「蟾蜍賦」

これらの詩賦はすべて『文苑英華』（中華書局影印本　一九六六年）に收められている。『文苑英華』と『全唐詩』『全唐文』の間に作者の異同のある作品があるので、ここで若干の說明を補っておく。

詩は「昭君怨三首」が卷二〇四に東方虬の作として收められる。これについては格別問題はない。「春雪」は卷一五四に韋應物の作として收められている。ただしこの詩は、『唐詩紀事』には東方虬の條に收める。(7)『全唐詩』も東方虬の作とする資料によったのであろう。作者に關する疑いはさしは

さんでいないようで、東方虬の條には一作者を注記せず、韋應物の卷にはこの詩を收めていない。

賦は三首とも卷一四二（蟲魚）に收める。ただし作者名を東方虬と明記するのは「蚯蚓賦」のみであり、すぐ後に續いて置かれる「蟾蜍賦」と「尺蠖賦」には作者名は記されておらず、また「前人」とも記されていない。『全唐文』が「蟾蜍賦」と「尺蠖賦」を東方虬の作としたのは、あるいは『文苑英華』の排列から同じ作者の作品と判斷したものであろうか。ちなみに『歷代賦彙』（中文出版社影印本　一九七四年）は「尺蠖賦」と「蚯蚓賦」を東方虬の作として卷一三九（鱗蟲）に收錄し、「蟾蜍賦」を「闕名」として卷一三七（鱗蟲）に收錄している。このような事情で、この三首の賦を東方虬の作と言い切ってしまうには些か問題があるが、いまはひとまず『全唐文』に從っておく。

さて、この三首の賦は、題名からも知られるように、奇妙な鱗蟲を詠じたものばかりである。何故このようなことになったのか。

いま『文苑英華』卷一三九より一四二に至る蟲魚の部には、蚯蚓、蟾蜍、尺蠖を題材とする賦は、この三首以外は收めていない。また『歷代賦彙』では、「蟾蜍賦」は卷一三七に唐の「闕名」の作（東方虬の作としておく）一首、「尺蠖賦」は卷一三九に劉宋の鮑照、唐の東方虬、宋の王禹偁の作各一首、「蚯蚓賦」は同じ卷に唐の東方虬、元の任士林の作各一首を收めるのみである。つまり東方虬の作品とされているのは、類題の總集に收められたとき、先行例・類例がないか、あってもごく少いものばかりなのである。すなわちこれら三首は、奇妙な題材ゆえに類例が少なく、そして類例が少い作品ゆえに注目されて類題の總集に採られ、かろうじて後世に傳えられたと考えてよいのではなかろうか。些か餘談であるが、かりに作者がこれらの奇妙な題材の賦を、意識的に珍奇さを狙って作ったのだとしたら、その狙いは見事に當ったことになる。

四

小稿は、既に述べた如く、初唐期の蚯蚓に關する文獻知識の様相を瞥見すべく「蚯蚓賦」の注解を試みるものである。この「蚯蚓賦」は、現在、『文苑英華』卷一四二（蟲魚四）、『歷代賦彙』卷一三九（鱗蟲三）、『全唐文』卷二〇八に收められている。この三種のテキストの中では、いうまでもなく『文苑英華』が最も古い。當然、その本文を尊重すべきであろ

う。また、上に述べたこの作品の傳承に關する推測――題材の珍しさゆえに類題の總集に收められて傳わった――が何ほどか妥當性を持つならば、その點からもこれを傳えてくれた『文苑英華』に敬意を拂わねばなるまい。いま注解を試みるにあたり、『文苑英華』の本文により、『歷代賦彙』『全唐文』で校訂を加えた。ただし「陰」と「陰」、「垂」と「垂」の如き細部の字體の正異については言及せず、通行の正字體にそろえてある。なお句讀點は私に施した。

注解の體裁は、本文の後に校記と注を掲げ、ついで試譯を施し、最後に韻字を示しておいた。まったくの試譯であり、私譯である。注の出典の指摘、譯文ともに我ながら心もとないところが多い。大方のご教示を仰ぎたい。

蚯蚓賦

惟陰陽之播氣、寔萬類以呈形。有微蟲之稟質、應甲子而濕生。雨欲垂而乃見、暑既至而先鳴。乍逶迤而鱔屈、或宛轉而蛇行。內乏筋骨、外無手足。任性行止、物擊便曲。徒進退而皓首、竟不知其所欲。東西詰屈、南北夤緣。上食塵塊、下飲淵泉。應軒轅土德之王、入蔡邕勸學之篇。其體甚微、其用至專。墐泥塗以自保、觸鹽滋而罔全。豈造化之賦命、信歸之於自然。

校記

寔　『歷代賦彙』『全唐文』には「實」に作る。

蛇　『歷代賦彙』『全唐文』には「蛇」に作る。

注

萬類　すべてのもの。『後漢書』杜篤傳に「號曰陸海、蠢生萬類」とある。

呈形　肉體を具有する。この二句、『易經』乾卦彖傳の「大哉乾元、萬物資始」および坤卦彖傳の「至哉坤元、萬物資生」、あるいは表現上の直接的な類似でいえば『淮南子』天文訓「道始於一。一而不生。故分而爲陰陽。陰陽合和而萬物生」にもとづくか。

稟質　天から授かった性質。

應甲子　「甲子」は干支の組合せ。ここは轉じて、季節、時候の意か。季節に應じて。

雨欲垂而乃見　『論衡』變動「故天且雨、螻蟻徙、丘蚓出、琴絃緩、固疾發。此物爲天所動之驗也」。

暑既至而先鳴　『禮記』月令「孟夏之月、（略）螻蟈鳴、蚯

蚓出」。

逶迤　曲っているさま。

鱔屈　鱔は鱓に同じ。ウミヘビ。ウミヘビの如く體を屈する。

內乏筋骨・外無手足　『說苑』雜言「夫蚯蚓內無筋骨之强、外無爪牙之利。然下飲黃泉、上食埃土。所以然者何也。用心一也」。類似の文が『荀子』勸學、『大戴禮記』勸學、『淮南子』說山訓、また後に引く蔡邕「勸學」などに見えるが、ここには「內」「外」を明確に對した例を擧げておく。

任性行止　蚯蚓は心がないといわれるが、それをふまえた表現か。『淮南子』墜形訓「食土者無心而慧（慧は不息の譌か）」、その高注「蚯蚓之屬是也」。

皓首　蚯蚓の年經たものを白頸蚯蚓という。『重修政和證類本草』（四部叢刊本）卷二二白頸蚯蚓の條、陶弘景の說に「白頸是其老者爾」とある。ここでは年老いる意の「皓首」に、この「白頸」をかけていったのであろう。

詰屈　かがまり曲がる。

貪緣　つらなる。また、「貪」が「延」に通ずると解して、「のびまつわる」ととることもできる。

上食……・下飲……　『孟子』滕文公下「夫蚓上食槁壤、下飲黃泉」。あるいは表現上の類似でいえば、『荀子』勸學「蟺無爪牙之利、筋骨之彊、上食埃土、下飲黃泉。用心一也」か。なお、蟺は蚓。

應軒轅土德之王　『宋書』符瑞志上、黃帝軒轅氏の條に「有大螻如羊、大蟺如虹。黃帝以土氣勝、遂以土德王」。黃帝の時、瑞祥として大蚯蚓が出現したという記事は『呂氏春秋』應同、『太平御覽』卷九四七所引『河圖說徵』、同『帝王世紀』などにも見えるが、いま、黃帝が土德を以て王となったことと、大蟺が瑞祥として出現したことを結びつけた記述を擧げておく。

入蔡邕勸學之篇　蔡邕「勸學」は今佚す。この記述に相當するのは、『藝文類聚』卷六地部、塵の條の「蔡邕勸學曰、蚓無爪牙、軟弱不便、穿穴洞地、食塵飲泉」という引用であろうか。

其用至專　前に擧げた『說苑』『荀子』などの「用心一也」を念頭に置いた表現か。なお『淮南子』說山訓にも「用心一也」とあり、そこには「一、情專也」と注されている。あるいは「專」の語はそれにもとづくか。

墐泥塗　墐は土をぬること。蚯蚓が土中で土にまみれていることをいうのであろう。

觸鹽滋而罔全　蚯蚓が鹽にあって溶けることをいう。鹽滋は鹽水。『重修政和證類本草』巻二二白頸蚯蚓の條、陶弘景の説に「取破去土鹽之、日暴、須臾成水」とある。

書き下し

惟れ陰陽の氣を播くや、寔に萬類以て形を呈す。微蟲の稟質有り、甲子に應じて濕生す。雨垂らんと欲して乃ち見はれ、暑既に至りて先づ鳴く。乍ち逶迤として鱔屈し、或は宛轉として虵行す。内に筋骨乏しく、外に手足無し。性に任せて行止し、物擊てば便ち曲がる。徒らに進退して皓首、竟に其の欲する所を知らず。東西に詰屈し、南北に貪緣す。上は塵塊を食ひ、下は淵泉に飲む。軒轅の土德の王たるに應じ、蔡邕の勸學の篇に入る。其の體は甚だ微なれども、其の用は至って專なり。泥塗を墐りて以て自ら保つも、鹽滋に觸れて全うする罔し。豈に造化の命を賦するや、信に之を自然に歸するなるか。

譯文

そもそも陰陽二氣が廣く天下に及び、萬物が形體をそなえるようになった。（蚯蚓は）微小の蟲の性質をさずかり、季節に應じて濕地に生ずるのである。雨が降りそうになるとあらわれ、暑さがくると先ず鳴き聲を立てる。うねうねと體を鱔のごとく屈するかと思えば、あるときはゆるく曲がって蛇のごとく行く。内には筋骨は乏しく、外には手足はない。本性のままに行動し、物にぶつかると曲る。いたずらに進んだり退いたりして年月をすごし、結局何をのぞんでいるのかわからない。東西にかがまり曲がり、南北にのびまつわる。上には地中の塵塊を食らい、下には地下の泉に水を飲む。（そのような微小のものでも）黄帝軒轅氏が土德を以て天子となったのに應じて瑞祥として出現したし、蔡邕の「勸學」の篇に取り入れられて教訓の材料になったこともある。その形體は甚だ微小だが、その働きはきわめてひたすらなものがあるのだ。（そうして）土中で泥にまみれてその身を保っているが、鹽水に觸れると生を全うすることはできなくなってしまう。これは、造物者によって命を與えられたものは、まことに自然の中に歸ってゆく、ということなのだろうか。

韻字　形（下平声一五青）・生・鳴・行（下平声一二庚）（通押

している)」足・曲・欲(入声三燭)」緣・泉・篇・專・全・然(下平声二仙)」

注

(1) あくまでも、ある程度、である。類書の普及度の問題、もとの典籍を直接讀んでいた可能性など、考慮すべきことが多い。類書に記載があるという事實のみですべてを判斷できると考えているわけではない。

(2) 拙稿「韓愈の『遊城南十六首　晚雨』詩をめぐって」『中國古典研究』第三十四號　一九八九年一二月)

(3) 「右臣先進所著一字題賦百首、退惟蕪累、方積兢憂、遽奉訓辭、俾加注釋。伏以類書之作、相沿頗多、蓋無綱條、率難記誦。今綜而成賦、則煥焉可觀。然而所徵既繁、必資箋注、仰聖謨之所及、在陋學以何稱。今並於逐句之下、以事解釋、隨所稱引、本於何書、庶令學者、知其所自。(下略)」(吳淑「進注事類賦狀」〈臺灣新興書局影明嘉靖刊本　一九七二年〉)

(4) 注(2)前掲拙稿。

(5) 徐鵬校『陳子昂集』(中華書局　一九六〇年)には『全唐詩』によって補遺に收める。そしてこの詩と「晦日重宴高氏林亭」「上元夜効小庾體」「三月三日宴王明府山亭」の四首には、『全唐詩』に『歲時雜詠』に見える旨の注を附することを記している。彭慶生注釋『陳子昂詩注』(四川人民出版社一九八一年)は、「上元夜効小庾體」詩の項の注で、この四首が『全唐詩』と清の楊國楨刊本にのみ收められ、『歲時雜詠』に見える旨の注記があることを記している。

(6) この詩の制作事情は、已に彭氏『陳子昂詩注』に指摘するとおり、『唐詩紀事』卷七高正臣の條に見える。「晦日宴高氏林亭、凡二十一人、皆以華字爲韻。子昂爲之序曰、云々」というものである。つまり詩題の「高氏」は高正臣のこと。『唐詩紀事』によれば「廣平人、官至衞尉卿。習右軍書法、睿宗最愛其筆」という人物である。その人の林亭に二十一名の人々が集って宴を開き、華字を韻字として詩を賦したのであった。そのときの參會者と詩が、『唐詩紀事』と『全唐詩』から拾い出せる。高正臣、崔知賢、韓仲宣、周彥昭、高球、弓嗣初、高瑾、王茂時、徐皓、長孫正隱、高紹、郎餘令、陳嘉言、周彥暉、高嶠、周思鈞、劉友賢(以上十七名は『唐詩記事』卷七、『全唐詩』卷七二)、王勔(『唐詩紀事』卷七、『全唐詩』卷五六)、陳子昂(『唐詩紀事』卷八には「晦日宴高氏林亭并序」詩を收めぬが、『全唐詩』卷八四には收める)、張錫(『唐詩紀事』卷九、『全唐詩』卷一〇五)、解琬(『唐詩紀事」卷一二、『全唐詩』卷一〇五)の二十一名、二十一首である。なお、高正臣の詩題は「高氏林亭」でなく、「晦日置酒林亭」であるのは言うまでもない。また『唐詩紀事』と『全唐詩』で詩題に異同があったり――『唐詩紀事』は

「晦日林亭」に作るが『全唐詩』には「晦日宴高氏林亭」に作ることが多い――、題が他の作者と違うこともある――『全唐詩』の王勔の詩は「晦日宴高氏林亭同用華字」とあるし、張錫の詩は『唐詩紀事』には「晦日宴高文學林亭」と題し、『全唐詩』も同じ題で、題下に「同用華字」と注する――など、細部の問題はあるが、内容や押韻から、同時の作と見なしてよいであろう。

この詩の制作時期について、彭慶生氏の推定を記しておく。「上元夜効小庾體」「晦日宴高氏林亭」「晦日重宴高氏林亭」「三月三日宴王明府山亭」の四首を、まずひとまとめに考える。そしてこの遊宴の參加者はその都度違っているけれども、陳子昂、崔知賢、韓仲宣、高瑾の四人は毎會參加しており、場所もみな洛陽である。この四回の遊宴は同じ時期のことであり、詩も同じ時期に作られたのであろう。そして孫愼行の「三月三日宴王明府山亭序」に「調露二年（六八〇）、暮春三日、同集于王令公之林亭、云々」とあるから、この「晦日宴高氏林亭」も調露二年の作ということになる。以上、『陳子昂詩注』「上元夜効小庾體」説明の項に見える説。（田口補、孫愼行の「序」は、『全唐詩』巻七二、崔知賢の「三月三日宴王明府山亭」詩の題下注に「孫愼行爲之序」云々と引かれるものをさすのであろう。）

（7）題は「詠春雪」に作る。

（一九九〇、八、二〇）

〔追記〕本稿を草するにあたり、訓譯について松浦友久教授の御教示をいただいた。

〔補記〕注解の中に引いた「有大螻如羊、大螾如虹。黃帝以土氣勝、遂以土德王」の記事を、注(2)に掲げた拙論に於て、四部叢刊本『竹書紀年』に據り、その所謂沈約注として引用した。本稿に於ては『四庫提要』の説に從い、典據を『宋書』符瑞志に改める。不學を慚じ、場違いではあるが此處に前稿を訂正させていただく。